

6) デンチョウゲ=沈丁花

デンチョウゲはデンチョウゲ科の常緑低木である。名前の由来は花に強い芳香があることから、『沈香』(デンコウ)と『丁字』(チョウジ)の花の香にたとえたものである。また『七里香』とか『千里香』といわれることもある。七里も離れたところにおいても、香りが漂ってくるというほどの意味である。もともとは中国原産で春3月ともなると、何処からともなくこの花の甘い香が漂いはじめて、人々に春の到来を感じさせてくれる。なるほど七里香も納得できるというわけである。また花を乾燥させたものは風邪をひいたとき、喉の痛みを和らげる働きがあるといわれ、日干しにした花を煎じて飲んだり、うがい薬として用いる。学名は『*Daphne odora*』で、属名はギリシャ神話のニンフ『ダフネ』に由来し、種小辞は芳香のあるという意味である。

デンチョウゲと同じ仲間には後述するミツマタがあり、これは古来よりコウゾ、ガンピとともに紙の原料として知られている。三つ又といわれるように、枝がいたるところ3本に分かれており、ジンチョウゲも同様である。また小枝を手で折ろうとしても、繊維質にとんだ樹皮のために、なかなか折ることはできない。無理をすると樹皮が全部剥けてしまう。なるほどこの樹皮は紙になるんだと納得できるのだが、デンチョウゲもこれと同属だけあって手折れない木である。

園芸品種には花が純白のシロバナデンチョウゲ、花弁の外側が淡紅で内側が白いウスベニデンチョウゲ、葉の外縁に黄色い斑の入ったフクリンデンチョウゲなどがある。沈丁花は雌雄異株(06-01-00 参照)で、実が着いているのを見た人は少ない。日本ではほとんどが雄株のためであろう。ちなみに雌株は『実なり沈丁花』といわれ、6月に赤い実がなる。陽当りを好むものの、どれも半日陰ぐらいでもよく育つ。繁殖は極めて容易で、春先の芽だし前、20cmほどの長さに切った小枝を鹿沼土に挿して日陰で管理し、週に2~3回ほど水を与えてあげれば、夏までには発根する。しかしデンチョウゲの苗木は白花以外はあまり売られていない。というのまかりに10本挿し木をすると、普通なら8本は発根する。これでは商品としての苗木とはなりにくい。近所から穂木をもらって挿しておけば、それで万事オーケーなのである。

ところでデンチョウゲを歌ったユーミンの『春よ、来い』といういい歌がある。NHKの連続ドラマのテーマソングにもなっていたからご存じの方も多だろう。

淡き光立つ俄雨 いとし面影の沈丁花
溢るる涙の蕾から ひとつ ひとつ香り始める

それは それは 空を越えて
やがて やがて 迎えに来る

春よ 遠き春よ 瞼閉じればそこに
愛をくれし君の なつかしき声がする

君に預けし 我が心は
今でも返事を待っています
どれほど月日が流れても
ずっと ずっと待っています

それは それは 明日を越えて
いつか いつか きっと届く

春よ まだ見ぬ春 迷い立ち止まるとき
夢をくれし君の 眼差しが肩を抱く

夢よ 浅き夢よ 私はここにいます
君を想いながら ひとり歩いています
流るる雨のごとく 流るる花のごとく

春よ 遠き春よ 瞼閉じればそこに
愛をくれし君の なつかしき声がする

春よ まだ見ぬ春 迷い立ち止まるとき
夢をくれし君の 眼差しが肩を抱く

春よ 遠き春よ 瞼閉じればそこに
愛をくれし君の なつかしき声がする

ユーミンの歌は作曲もさることながら、詩のほうが一層すばらしい。我々日本人は、つい先の世界大戦以前は、儒教という古い道徳律に多かれ少なかれ縛られてきた。しかし戦後に生まれたいわゆる『団塊の世代』以降は、そんなことはおかまいなしに古い態勢をどんどん壊してしまった。安保闘争も学園紛争も、その一つに過ぎなかったし、家族関係や夫婦のあり方までも、たとえば上村一夫の『同棲時代』という劇画に見られるように、今までとは違う新しい形を示して、それを実践した。そして古い秩序や道徳律と、新しい価値観との混乱は今日まで続いており、しかもその範囲をどんどん広げているように見える。そういう歴史的な見地から見れば、昨今叫ばれている

規制緩和などの旧状の打破は、本来もう 20 年も前に行なわれるべきだったのだろう。そんな中であってユーミンは、日本人の『歌』の概念をまったく新しいものに変えてしまったと言ってもいいように思えてならない。

もともと団塊の世代以前の日本人の歌は、基本的には『演歌』と『民謡』であった。シャンソンとかジャズなどというものは、ごく一部の趣味人の道楽だったのである。そして演歌の歌詞の大半は、既存の道徳律と自分の意識との狭間で苦しむ姿だったり、古い道徳率に縛られながら生きている人々の生きざまだった。これをもう少し若者感覚でリメイクしたのは谷村新司を初めとする『アリス』の面々ということもできようが、それに続いたユーミンは、今まで誰もが越えることができなかった、日本人の『心のハードル』を、いとも簡単に飛び越えてしまったのである。今までの日本人で、「ソーダ水の中を貨物船が通る」(『海を見ていた午後』)などと表現した作詞家がいたのだろうか。白い豪華船は登場しても、貨物船は絵にならなかったのである。しかし彼女は「僕は無精ヒゲと髪をのぼして学生集会へも時々出かけた」(『いちご白書』をもう一度)などというように、日常のこととはいえ、あまり美しくないことでも、何の抵抗もなく自分の歌の中に取り込み、しかもそれを洒落た曲に仕上げてみせた。高度成長時代の混沌と希望の中で、彼女は実に素直に自分の直面する問題に取り組み、自分の言葉で青春という甘く切ない一ページを語り尽くしたのだ。この点ユーミンは天性のコピーライターといえるかも知れない。そして同じ時代、アンアンとかノンノとか今までになかった新しいタイプの雑誌が次々と登場した。別の言い方をすればユーミンは、時代のターニングポイントに当たって、登場すべくして現れた時代の申し子だったということもできよう。だからこそ当時の同世代の若者から、更にはその次の時代の団塊ジュニアにいたるまで、圧倒的な支持をかちとったのである。さらに彼女の歌声はアルタイ山脈周辺民族に伝わる『ホーミー』という独特の歌声に酷似しており、人の心を癒す効果があった。しかし彼女は自分でも言っていたように、作詞や作曲のきわだった巧みに比して、歌の方は完璧とまでは行かなかった。このため彼女のステージはビジュアルを優先し、視覚と聴覚と両方に訴えかけようとした。ユーミンの全国ツアーは次第に 11t 積みのトラックが何台も同行するほど、大がかりな舞台装置を伴って行くようになっていった。しかしその『舞台装置』は常に彼女を巧みに引き立て、ユーミンのスリムなボディラインを輝かしく見せてくれた。そしてユーミンが身にまとうコスチュームは、どこかに寂しげな叙情と、どこかにエレガントな上品さと、そしてぼんやりとした、それでいながら輝く希望がそこはかとなく現れていた。彼女が学生時代に培った『美学』が滲み出ていたからだろう。それに彼女のアルバムのジャケットも素晴らしいものが多かった。一番印象に残っているのは、『流線形 '80』である。星空を飛ぶ赤いスポーツカーが夢多き時代を象徴しているようでもあった。このイラストを描いた矢吹申彦氏は大正・昭和のレトロなイラストをよく描いていたが、

この作品にはそんな懐かしい時代感と、現代のメルヘンが同居しているように見えた。

ユーミンが中学高校時代を過ごしたのは立教女学院である。煉瓦造りの学び舎と、大きく枝を広げたクスノキが繁るキャンパスは、伝統と格式を漂わせている。そして彼女が音楽の道へ進むきっかけになったというパイプオルガンの調べを、筆者は一度聴いてみたいと思っている。チャペルのパイプオルガンは、どんな時代も平和を願い続けてきた。そして人々の心の奥底に、生きる希望と勇気を育ててきた。楽器はどれも素晴らしいが、パイプオルガンほど愛と平和を奏で続けてきた楽器は他にはないだろう。だから筆者は秘かに彼女がギターを爪弾いたという『マーガレット祭』に行ってみたくて思っているのである。彼女の音楽はおそらく何百万人もの、心悲しむ人の魂を救って来ただろうと思うとき、人間のなすべき仕事とは一体何なのだろうと、素朴な疑問を抱き、自己嫌悪に陥りそうになってしまう。『いちご白書』を聴くたびに青春時代を懐かしみ、しばし過去の思い出にふけるのは筆者だけではないだろう。ユーミンの人の心を癒し続ける根源となったアートの原点と、その風景に触れてみたいと思うのである。

そのユーミンがデビューして既に 40 年になる。最初のアルバム『飛行機雲』のバックを固めた伝説のバンド「キャラメルママ」は、「ティン・パン・アレー」と名称を変更したものの、今もメンバーは健在である。細野晴臣氏、鈴木茂氏、林立夫氏、そして松任谷正隆氏、そうそうたるメンバーである。もしこのバンドがなかったら、ユーミンは今も健在であったか疑問である。荒井由実も健在でも、それはユーミンではなかったかも知れない。松任谷正隆氏はある番組の中で、『俺はユーミンに拾われて、今日がある』というようなことを、謙遜をこめて告白していたことがあったが、二人の出会いには肝胆相照らすものがあつたように思えてならない。芸術はいつだってほんの小さな出会いから生まれるように思える。それが悲しみであることも、苦しみであることも、またロマンスであることもあるだろう。しかしその出会いが時には大きな力になって、人の心を動かす。涙を誘うのも芸術であり、涙をぬぐうのもまた芸術であるのだ。そういう点で筆者はユーミンを尊敬し、最も多くの若者の魂を救った一人ではないかと思っているのである。

さて彼女の後に登場したのが、ビジュアルを最優先する映像時代のミュージシャン達で、歌の善し悪しはさておき、エレキバンドやバックダンサーの動きなど、とことんショービジネス化されたステージをつくりあげた。いわばユーミンの技法の都合のいい部分だけを取り入れて、まったくのショービジネスとして確立したのである。ここにおいて歌は単なるショーの構成要素の一つになってしまったことは、映像最優先時代という歴史の皮肉というべきかも知れない。しかしこの次の時代の歌手は、どんなタイプになるのかは別として、歌の善し悪しを問われることだけは間違いないだろう。

ところでジンチョウゲは 3 月のお彼岸のころに、頭状花序の花を枝先に 10~20 個かためてつける。そして『溢るる涙の蕾から一つ一つ香り始める』のである。



白花ジンチョウゲ、紅花種より珍しいのと、純白で上品なため珍重されるが、香りは紅花種の方が数段勝っている。天はそれぞれに等しく価値を分散させたのだろう(群馬県安中市)。



ウスベニジンチョウゲ、素晴らしい香が春3月の空気を染める(群馬県安中市)。

[目次に戻る](#)